

その一

「おまえ、人を育てるのがヘタクソやなあ」
しみじみと社長にそう切り出されたのは、
2006年の春でした。

「考えてみたら、おまえだけじゃないな。
先代（社長）がそう、亡くなった専務がそ
う、タクちゃん（わが社で伝説となっている
技術屋さん）もそう（全員が故人です）。う
ちで仕事ができる人間は、みんな人を育てる
のがヘタクソやった」

「そしたら社長はどうなんですか」

「オレは・・・、おまえを育てたやない
か。それだけで十分よ（笑）」

いや、自覚がないわけではなかったの
です。たしかに人が思うように育っていなかつ
たのは事実でした。しかし、現実はそうであ
っても、「面と向かってそんなキツイことを
よくいえませぬ」と笑いながら、心の中では
怒りや情けなさが渦巻いていました。

私にそう言った当人に対してではありませ

ん。現実を客観的にみると、誰がみても社長のいうとおりだったのです。そして、ここから歯車は逆に回り始めます。人材が育たないことには会社の将来は危ない。そう考えた私は、さらに「押しつけ」を増やすことになりました。押しつければ押しつけるほど、若い技術屋さんたちは萎縮していき、何とも居心地の悪い職場へとなっていくのでした。

ところが当時の私はそのことにすら気づかず、ただひたすら会社の将来のため、若手の将来のために「よかれ」と思い、こぶしを振り上げ熱弁をふるう毎日なのでした。

「俺のこの熱い思いがなぜわからないんだ！」

今になって思い起こしてみると、少し滑稽なところもあるのですが、当時の私は真剣そのものだったのです。